

1

2 A	社会 (小)
-----	--------

 岡崎市立大樹寺小学校 星野 智史

2 研究テーマ

**主体的な追究活動から、よりよい社会づくりを考える子の育成
—3年「ボくら大樹寺小3の3消防団」の実践から—**

3 研究概要

(1) 主題設定の理由

昨年度の研究(3年「店で働く人」)では、地域にあるスーパーマーケットと個人商店を調査した際、身近な存在であることから、意欲的に調査を進める子供の様子が見られた。地域に根差した教材を活用した単元の計画には、子供の意欲を高める価値を感じた。また、予想する時間の確保や学習計画表の作成により、自ら設定した計画に沿って追究を深めることができた。しかし、調査の際に見つかった課題の解決に向けて地域社会へ参画していこうとする意識の高まりまで促すことができなかった。これらの成果と課題を踏まえ、今年度は地域教材を取り入れることによって主体的な追究活動を生む単元構成や、よりよい社会づくりを考える子供を育むための教師支援を課題として、本研究の主題を設定した。

(2) 「主体的な追究活動」「よりよい社会づくりを考える」の定義

「主体的な追究活動」とは →社会的な事象に興味関心を抱き、その仕組みを自ら進んで調べていこうとする姿	「よりよい社会づくりを考える」とは →社会的な課題に対してどのように関わっていくかを考えたり、実践したりしていく姿
---	--

(3) 研究の仮説と手立て

本単元における仮説と手立てを次のように設定した。

仮説Ⅰ：火事から暮らしを守る仕組みを追究する活動において、遊び的な要素を取り入れ、自ら学び方を選択できるようにしたり、実際に火事から暮らしを守る人々や施設を調査する活動を行ったりすれば、子供たちは学びに面白さを感じ、主体的に追究活動に取り組んでいくだろう。

手立て①：3の3消防団の結成

単元の導入で子供たちを3の3消防団とする「ごっこ活動」を取り入れ、動機づけを行う。子供なりに消防団員としての意識をもつことによって、火事から暮らしを守るための仕組みを学ぶ意欲を高めていく。

手立て③：体験的調査活動

消防署や消防団、町の消防施設など、火事から暮らしを守る役割を担う人や物を実際に見たり、触れたりすることで、実感を伴って理解し、次の学びを生み出していく。

手立て③：選択型追究

調べ学習を行う際、子供が一人で学ぶのか、友達と学ぶのか選択する場を設ける。個人追究や協働的に学ぶことよさに気付き、その場に応じた活動の在り方に気付いていく。

仮説Ⅱ：学区の特徴を知り、地域の人との交流を通して問題点と出会い、解決するための改善策を考えたり、自分たちのアイデアを発信したりする場を設定すれば、子供たちは自分事としてよりよい社会づくりを考え、できることを進んで行うようになるだろう。

手立て④：学区の教材化

学区を教材にすることで、社会的な問題が身近な存在となり、自分事として社会の仕組みについてより真剣に考えるようになっていく。

手立て⑤：地域の人々の活用

地域の人々を活用することで、火事から暮らしを守るために活動をしている人と直接出会うことができ、自分たちにできることをイメージしやすくする。

手立て⑥：発信の場の設定

子供が社会的な問題に対して、自分たちが考えたことを実践できるように、学校内の掲示場所やお昼の放送等を発信する場として設ける。

4 研究実践 第3学年社会「ボくら大樹寺小3の3消防団」の実践を通して

(1) 単元計画

単元計画を15時間完了とし、以下資料①として設定した。

資料①：単元計画表

時間	学習課題	内容	手立て
1	「大樹寺小3の3消防団」の結成だ!	・令和4年度岡崎市の火事の件数提示	①
3	消防士さんはどんな取り組みをしているのだろう	・火事現場に集まる人々の調査 ・消防士の活動の予想と追究	②③④
1	なぜ火事が起きると、すばやく多くの人たちが協力できるのだろう	・消防指令センターについての調査 ・学ぶ相手の選択	③
3	身の回りにはどんな消防しせつがあるのだろう	・学校内外の消防施設の調査	②③④
3	消防団って何?どんなことをしているの?	・消防団の活動についての予想と追究、体験活動	②④⑤
1	調査してきたことを整理しよう	・火事から暮らしを守る仕組みの整理	③
3	大樹寺小3の3消防団の活動開始!	・自分たちにできることの提案と発信	⑥

(2) 抽出児の設定

本実践の抽出児Aはどの教科でも学ぶべきことに対して意欲的に取り組むことができる。自分の意見を意欲

水とかが出なかったら、何もできないから」など訓練を行っている事実から確実に救助を行うためだと考える意見が出された。A児はA46で「すぐに助けるため」と述べた。その前の話し合いで、A児は前頁資料⑨のA7「服を整頓している」と意見を述べていたが、そこから「救助のため」と考えを深めていった。最後まで意見が途切れず、発言総数が48回にのぼる熱気のコもった1時間となった。

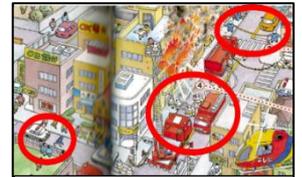
消防士さんは1人でも多く助けたいからかならず、すぐにいつでも助けられるようにしていることがわかった。自分のめあては火事が起きないときどうしているか調べたいでした。訓練をしていることがわかりました。休みもあることがわかりました。消火器を使ってみて、こんなに中から水が出るんだとびっくりしました。使い方も知れて良かったです。

資料⑩：第5時A児の振り返り

資料⑩の振り返りでは、A児は「すぐに、いつでも助けられるようにしている」と気付くことができていた。また、消火器体験における驚きと満足感を綴っていたのである。

【3】第5時「なぜ火事が起きると、すばやく多くの人たちが協力できるのだろう」

授業の始めに火事が起きたら何番に電話するのか問うと、「119番に通報する」と答えが返ってきた。教師が119番通報はどこにつながるのか問うと、子供たちは消防署だと答えた。そこで第2時の教科書の挿絵(資料⑫)を確認するように促した。すると、ある児童が「おかしい」とつぶやいた。挿絵には消防士以外の人が多く描かれていたからである。その理由を聞くと、「119番通報が消防署につながるなら、消防士しか現場には来ないはず」と答えた。それを聞いた子供たちが「確かに」という声が上がったため、通報後の流れについて調査することになった。



資料⑫：第6時提示した挿絵

調査する資料は郷土読本「おかざき」、時間は10分間とし、個人追究するか、協働的に行うかを子供たちに委ねた(手立て③「選択型追究」)。A児は始め個人で追究を始めた。7分ほど個人で追究した後、チームで追究活動を行った。資料⑬のようにA児は「消防署に指示を出す」「ガス会社にも連絡する」ことをつかんでいった。これまで友達と一緒に活動していたA児に変化が見られた。資料⑭のA児の振り返りでは、教科書を使って分かることを自分でまとめていく活動を行う際は、個人で追究した方がよいことに気付いていった。



資料⑬：第6時 1人で追究するA児の様子とノートの記述

119番にかけると、かかわる人たちが集まってくるのがわかりました。今日の自分の学び方は、さいしょは1人でやりました。教科書を見ながらやったら、3つ分かったことが書けました。さいしょは1人で考えた方が、一気にわかることを見つけたことができました。

資料⑭：第6時A児の振り返り

【4】第6～8時「身の回りにはどんな消防しせつがあるのだろう」

導入で、消防署で体験した消火器の写真を提示した。すぐに子供たちは「消火器だ」とつぶやいた。そこで「消火器って学校のどこにあるの?」と問いかけた。すると「たぶん～」と言った意見が続いたため、「本当に?」と問いかけると、調べたいという声が上がってきた。こうして学校内の消防施設について調査することになった(手立て②「体験的調査活動」)。



資料⑮：第7時消防施設探しの様子



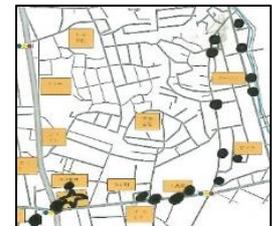
資料⑯：完成した校内地図

消防施設とは何か説明した後、学校内を回って「スクールタクト」に調査結果をまとめていった。消火器や消火栓、防火扉など気に留めたことのない子供たちは「こんなところにあった」「こっちにもあった」と宝探しをするように、学校内にある消防施設を見つけていった(資料⑮)。それぞれで調査した後、見つけた消防施設を拡大した校内地図に貼っていった。資料⑯は完成した校内地図である。地図いっぱい広がったシールを見て、子供たちは消火器や消火栓の数を数えたり、集まっている場所の理由を考えたりしていた。学校内の消防施設について調査することを終えた子供たちの意識は自然と学区へ向けられていった。そして学区にある消防施設調査へと動き出していったのである(手立て④「学区の教材化」)。

- T1: 歩いてきた道には何個消防施設があったかな。
 A1: 14個ありました。
 T2: どう思った?
 A2: 思ったより多くてびっくりしました。
 C3: うん、多かった。
 C4: めっちゃ多い、びっくり。
 C5: 多いんだけど、これってまだ学区のこれだけで14個だから、他にも調べたら、もっとありそう。
 C6: たしかに。
 C7: たしかに。 もっと調べてみたい。
 T3: なるほど。どうやったら調べられるかな。
 A8: もっと学区を探検してみる。
 C9: やりたい。
 C10: でもそれだと時間がかかっちゃう。
 T6: たしかに。みんなで手分けする方法はないかな。
 C11: 自分の家の周りを調べてみたらどうですか。
 C全: おーっ。たしかに。

資料⑰：第8時の授業記録

学区の調査活動では、「3の3消防団」の法被を羽織り、意気揚々と出かけた。普段何気なく歩いている通学路で消火栓や防火水槽の看板を見つけると、指を差して「あった!」と嬉々とした表情を浮かべていた(手立て②「体験的調査活動」)。A児は看板の周りを探し、道路にある「しょうかせん」と書かれた蓋を見つけ、「ここに消火栓があるのかも」とチームの仲間とつぶやき合っていた。約40分の道のりを歩いた後、学校に戻り、調査について思ったことを話し合った(資料⑰)。T1で消防施設の数を尋ねると、A1は「14個ありました」と答え、A2「思ったより多くてびっくりしました」C4「めっちゃ多い、びっくり」と驚きの声が上がった。さらにC7「もっと調べてみたい」と思ったことを伝えると、どのように調査するか考え始めた。すると、C11が「自分の家の周りを調べてみたらどうですか」という提案をしてきた。子供たちがその意見に同意したため、個々で調査をすることになっていったのである(手立て③「選択型学習」)。



資料⑱：A児の消防施設調査地図 (●は消火器)

A児は家庭で母親と一緒に家の周りを歩いたり、通学路を車で走ったりして、保護者とともに個人追究を行った。資料⑱のように、通学路や家の周りにある消防施設がどれだけあるのか興味をもち、自ら学習を進めていったのである。不安で友達とともに追究しがちであったA児が少しずつ変わり始めていた。

第8時で、追究を行ってきた学区の消防施設の場所について地図にシールを貼り、学区の消防施設地図を完成させた。その後、前時で作った学校内消防施設地図と比較を行い、共通点について話し合った(資料⑲)。T7で学区と学校の消防施設の共通点について問うてみた。A14「全体を見ると、散らばっている」という発言から、全体の共通認識が生まれ、C16「どうしてだろう」と疑問が生まれていった。そこで「消防施設が分散されている目的は何か」という点をじっくり考えてみることになった。

C18「消防施設がないところで火事が起きたら、消せなくて困っちゃう」という消防士の仕事についての意見から始まった。さらに、C20「どこでも火を使うから」で、どこで起きるかわからない火事に対して備えるために広範囲に消防施設を設置しているという考えが生まれた。しかし、その考えが浸透していないと感じたため、T10で「どういうことか言い換えて」と問い返すと、C21「どこでも火事が起きてもいいように」という発言が出され、クラス全体から納得の声が上がった。

資料⑭は第8時のA児の振り返りである。A児は資料⑬の「消防施設が分散されている目的」についての話し合いでは、意見を述べるができなかったものの、振り返りでは「どこで起きてもいいようにちらばっておい

【5】第9～11時「消防団って何？どんなことをしているの？」

第2時で火事現場に集まる挿絵から分かることを読み取っていく活動を行った際、消防士や警察、救助隊のどれとも異なる服装の人物の存在を子供たちは見つけていた(P. 2)。しかし、どのような人物なのかが分からなかったため、「謎の人物」としていた。第10時では、始めに「謎の人物」を消防団であることを伝えた。すると子供たちは、「3の3消防団と同じ名前だ」「何してるんだろう」と興味をもち始め、消防団について調査をすることとなった。

まず、「おかざき」の挿絵や消防団の観閲式の写真(資料⑮)を提示して活動を予想した。子供から消防士の活動からつながって「点検」や「消防車の中身のチェック」といった予想が出てきた(資料⑯)。さらに資料⑰を見て、「水を出している」といった意見も出たものの、それに対して、「消防団は水を使ってもよいのか」という疑問も生まれた。だんだん子供たちの消防団への興味が沸き上がっていることを感じたため、子供たちに一つの提案を行うことにした。それは「消防団の出前授業」である(手立て④「学区の教材化」)(手立て⑤「地域の人の活用」)。この提案に子供たちからは歓声の声が上がった。新たな体験的な学習に期待が大きく膨らんでいたのである。

「消防団出前授業」は本校の校庭で行われた。子供たちは3の3消防団の法被を着て校庭に出た。運動場に行って来た消防車を前に子供たちの喜びは爆発した。すっかり消防団気分である。岩津消防団1部団長に出会うと、A児が「あ、いつも道路に立っている人だ」とつぶやいた。団長はA児の登校する通学路に毎朝立っている交通指導員もやっている方で、お互い顔なじみの様子だった。

団長の話を伺った後、消防車に乗ったり、放水用のホースを持たせてもらったりする体験を行った(手立て②「体験的調査活動」)。いろいろな機器がつまった消防車に乗ったA児は興味津々であった。身を乗り出して、車内の様子を見たり、ホースを持ったりと意欲的に体験を行っていた(資料⑳)。

第11時で消防団員の方の取り組みについて話し合いを行った(資料㉑)。T1で「消防団の見学から分かったことと思ったこと」について問うた。C30「あそこの川が近いとかかわかるのがすごい」C32「消防団の車の中にはマップがあった」A35「朝5時から訓練があることが分かった」C37「放水のときもそれくらい水の勢いがあるって水が消えるんだから」など、どれも実際に消防団員に話を聞いたり、体験したりしないといけないような内容の発言が次々と続いた。地域の人々と貴重な交流をした成果が生まれていると感じた。自分の分かったこと、思ったことを次々と伝えていく子供たち。ここでさらに消防団員の思いにまで子供たちの意識を繋げたいと考え、資料㉒のT19で「消防団員の人たちはこんな大変な思いをしてまで、どうして消防団をやっているんだろう」と問うてみた。C42「消防士さんだけでは大変だから」、C43「消防士の手が足りないときに一緒にやるため」などあくまでも消防団員は消防士の仕事の手伝いとして役に立っていることが誇らしいのではないかという発言が続いた。次にA44「地域の人を助けたいから」という発言が生まれた。実は消防団への聞き取り調査の際、団長が「自分の住んでいる地域には友達も親戚も自分の子供もいる。この人たちを助けたい」という思いを述べていた。ここにA児は着目したのである。しかしその後、A児につながるような発言が出なかったため、T20「役に立ってうれしいなら、もっと広い範

- T7: 学区の消防施設と学校の消防施設で似ているところはありますか。
- C13: ぼくは、どちらも消火栓が結構あると思いました。
- A14: ぼくは、どちらも全体を見ると、散らばっているなどと思いました。
- T8: どういうこと。
- C15: どちらも消防施設がいろいろなところにあるってことだと思います。
- C16: ぼくはAにつけたしで、どうしてだろうと思いました。
- T9: じゃあC16の疑問のように、どうして散らばっているんだろう。ちよっと考えてみて。
- C17: わたしは火事の近くになると火が大きくなるからだと思います。
- C18: ぼくは、消防施設がないところで火事が起きたら、消せなくて困っちゃうからだと思います。
- C19: 消防士さんが火事を消すために来るまで、時間をかせがないといけないからじゃないかなと思います。
- C20: ぼくはどこでも火を使うからだと思います。
- T10: どういうことか言い換えて。
- C21: つけたしで、料理を作るお店屋さんには火を使って、そんな料理屋さんはどこでもあるから、どこでも火事が起きてもいいようにだと思います。
- C全: たしかに。

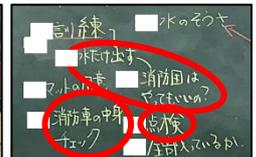
資料⑰: 第9時の授業記録

消防しせつはどこで起きてもいいようにちらばっておい

資料⑱: 第8時A児の振り返り



資料⑮: 郷土誌本「おかざき」に掲載されている資料と消防団観閲式の様子



資料⑯: 第10時板書



資料⑳: 消防団による体験活動の様子

- T1: どんなことをやっていたか、分かったことと思ったことを教えてね。
- C1: 500人の人が消防団をやっているだと思います。
- C2: わたしは火事が起きたとき、消防士よりも先に火を消すだと思います。(中略)
- C30: ぼくは、山とかの大きな火事が水がないと、川の水を使って、あそこの川が近いとかかわかるのがすごいなっていました。
- T11: それなんでわかるんだっけ。
- C31: 地域の人だから。
- C32: 消防団の車の中にはマップがあった。
- C33: 訓練をしていました。がんばってるなって。
- C34: 消防士にも消防団にも女の子がいるって知りました。
- A35: ぼくは朝5時から訓練があることが分かりました。なんでやるんだろう。
- C36: ぼくは火が消えても、いつ火がある一回出てもおかしくないから、朝まで見守っているのが大変だと思っていました。
- C37: ぼくはホースから水を出したときに、腕に当たると骨が折れると聞いていて、放水のときもそれくらい水の勢いがあるって水が消えるんだから、バケツでかけるくらいじゃ消えない。

資料㉑: 第11時授業記録1

- T19: 消防団員の人たちはこんな大変な思いをしてまで、どうして消防団をやっているんだろう。
- C42: 消防士さんだけでは大変だから。
- C43: わたしは消防士の手が足りないときになったときに一緒にやるためだと思います。
- A44: ぼくは地域の人を助けたいからだと思います。
- C45: ぼくは消防士だけでは消えない火があったときに、みんなが死んじゃったからだから、消防士の役に立ってうれしいと思います。
- C46: ぼくは消防士さんだけだと、もっといれればもっと早く着けばという思いからだと思います。
- T20: 役に立ってうれしいならもっと広い範囲で消防士として活動すればいいんじゃない。
- C47: 消防士になれば、家族に会えなくなったり、川の場合とかが分からなくなったりするからかな。
- C48: 地域の人々を守って笑顔を見たいから。
- C全: (拍手)
- C49: ぼくも地域の人を守りたいからだと思います。
- C50: わたしも地域の人を助けたいからだと思います。

資料㉒: 第11時授業記録2

「地域のみんなを守って笑顔を見たいから」という発言が出る。すると、拍手が生まれた。その後もC49、C50と「地域の人を守りたい」という発言が続き、消防団員の地域に対する思いが子供たちにつながっていったのである。

資料⑥の振り返りでA児は「地域の人たちを助けたいから消防団をやっていることが分かった」と綴り、消防団員が地域の人を守りたいという思いを捉えていた。また、「防火服とかボタンとかお茶、マイクがいっぱいあった」と実際に消防車に乗った体験から感じたことを述べていた。

消防団の人たちは地いきの人たちを助けたいから消防団をやっていることがわかった。ぼくが一番勉強になったことは大きな火はホースが10本ないと消せないこともわかった。消防車に乗ってみて思ったことは、防火服とかボタンとかお茶、マイクがいっぱいあった。

資料⑥：第11時A児の振り返り

【6】第12時「調さしてきたことを整理しよう」

3の3消防団として多くのことを学んできた子供たち。実際に活動に入る前に一度学んできたことを整理する時間をとった。ここまで様々な場面で学び方を選択してきた、個人で追究するか、友達と協働的に学ぶべきか正しい選択ができるようになってきたと感じたため、整理の時間として、授業1時間分子供たちに委ねることにした（手立て③「選択型学習」）。

A児は3分経つと、隣の子と席を近づけた。相談しながら行うかと思ったが、話し合う様子がない。隣の子が追究に困り感を感じるとA児に相談し、A児がアドバイスをしていたのであった。そのまま30分間、A児は個人で追究を深めた。資料⑦の黒字部分が30分でまとめ切った内容である。その後、調べ切った様子が見られたため、「チームで伝え合ってみたらどうか」とアドバイスをしたところ、A児はチームの子に声を掛け、チームで調査したことを伝え合い始めた。伝え合う時間ではA児は自信をもって「消防士は訓練をしていること」「消防団にも銀色の防火服がある」ことを述べていた。また、チームの子がまとめた内容で自分のノートに記述がなかった場合、書き加えることや自分の意見と似たような内容にアンダーラインを引くといった活動を自ら進んで行っていた。資料⑦の赤字のところはその記述である。

資料⑦：第12時A児がまとめたノート

資料⑧の振り返りでは、A児は「勉強したことをふりかえったら、自分でどんどん進めました。勉強したことをふりかえるときは、さいしょは自分でやった方がいいと思いました」と綴った。A児は学びを整理する場面において、始めに個別追究を行うことの良さを感じていた。さらに「どんどん書いた意見をいっぱいしゃべったり聞いたりしました」と綴っていた。個人追究を深め切ったからこそ、友達に自分の考えを自信をもって伝え、友達の意見に興味をもって聞くことで、資料⑦にもあるように、友達の意見を取り入れて書き加えることもできていた。A児にとって個別追究の良さ、協働的な学習の良さを実感することができた1時間となったのである。

今日まずはちょっとだけ1人でやっていました。その後、黒字さんと2人でやりました。さいしょはちょっとだけ意見をしゃべったけど、勉強したことをふりかえったら、自分でどんどん進めました。勉強したことをふりかえるときは、さいしょは自分でやった方がいいと思いました。その後、黒字さんが入ってからどんどん書いた意見をいっぱいしゃべったり聞いたりしました。

資料⑧：第12時A児の振り返り

【7】第13～15時「大樹寺小3の3消防団の活動開始！自分に何ができるのかな」

3の3消防団として活動するための知識を得てきた子供たち。そんな子供たちに「次どんなことをしたいか」と尋ねた。すると、子供たちから「3の3消防団の活動がしたい」という声次々と上がった。そこで「よし、やってみよう」と伝えると、子供たちからは「おおー」「やったー」という歓喜の声が上がった。そして消防団としての活動内容の検討に入っていた。資料⑨はそのときの話し合いの様子である。

C7、A9「どこで火事が起きているか伝える」は、消防指令センターの役割を学習したことや消防団がスピーカーを持っていることから発想を広げたものであるが、現実的ではない提案だった。そこでT6「みんなが調べてきた知識を伝えるっていう方法って何かないかな」と問い返した。すると、C15「消火器の使い方を知らせることをしたい」という自分が知らなかった経験から消火器の使い方を知らせることを考えた。またC17「消防団の人は人手が足りないから、みんなにやってみてほしいと言っていた」C18「消防士も小学生に目指してほしいと言っていた」という人手不足についての問題点を思いついた子から発想を広げ、C19「ポスターで知らせる」という考えが生まれた。このようにして、自分たちの学びを多くの人に伝えていくという形で活動内容が決まっていたのである。その後、どの活動をやりたいか、選択した後、同じ内容を選んだ子たちでチームを作って活動を始めた。

T5：3の3消防団として自分たちに何ができるかな。
 C7：火事が起きたらどこで火事が起きているかに伝えて避難したいです。
 C8：わたしは人の家に行って、火事が起きないように火事を防ぐためにやっていると聞いた方がいいと思います。
 A9：つけたして、火事が起きていることを知らせて避難所がどこにあるのか伝える。（中略）
 C14：消防施設の場所を覚えて消防車が来るまでの時間を地域の人に消防施設はここだよ知らせることです。
 T6：ここまで、みんなは火事から暮らしを守る仕組みを学んできたよね。みんなが調べてきた知識を伝えるっていう方法って何かないかな。
 C15：消火器の使い方は知りませんでした。使い方を知らせることをしたいです。
 C16：つけたして、学校にある消火器の場所を伝えることもできるかなと思いました。
 T7：なるほどね。関わってきた人が困っていたことはなかった。
 C17：あ、消防団の人は人手が足りないから、みんなにやってみてほしいと言っていた。
 C18：消防士さんも小学生に消防士を目指してほしいって言うてました。
 T8：だったね。どうしたら、知らせたりできそうかな。
 C19：魅力やどんなことをしてるか、ポスターで知らせる。
 C全：あー。できそう。

資料⑩はチームで活動を決めた後のA児の振り返りである。

A児は消火器の使い方を動画にして知らせる活動を選択した。理由として「自分の手で火を消す方法が分かるようになってほしいと思ったから」と綴っている。A児に単元が始まる前のような、自分のやりたいことを選択できない姿はどこにもなかった。さらには、「ちょうせんしてみようとおもいます」と最後に綴っており、自分のやりたいことに対して積極的に実践しようとする姿勢を見せていた。主体性あふれるA児の姿がそこにはあったのである。

資料⑨：第13時授業記録

第14時からA児チームの活動が始まった。まずは動画で撮影する内容の整理から始まった。次頁資料⑪のノートがその整理の様子である。消火器の使い方を3カットに分け、始めと終わりのあいさつを入れるなど、分かりやすい動画にするために、相談を重ねていった。その後、消防署から借りてきた消火器を用いて

ぼくは、消火器の使い方を動画でしようかいいことにしました。火事が起きたときに、自分の手で火を消す方法がわかるようになってほしいと思ったからです。動画でまとめることにしたけど、むずかしそうだなと思います。でもちょうせんしてみようとおもいます。

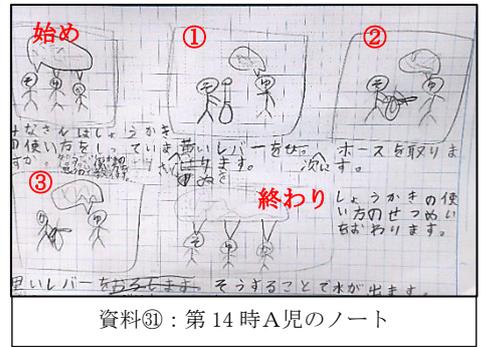
資料⑩：第13時A児の振り返り

動画撮影を行った(資料⑩)。3の3消防団の法被を着て納得いくまで何度も動画を撮影するA児の姿があった。

その後、撮影した動画をアプリで1つにつなげ、消火器の使い方の動画が完成した。その動画を誰に伝えたいか尋ねると、A児たちは「全校に広めたい」と訴えてきた。その熱意を感じ、お昼の放送で全校に動画を流すことを提案した(手立て⑥「発信の場の設定」)。A児は少し緊張した表情を浮かべながらも、「やります」と答えた。

給食の時間、放送室に向かい、全校に向けてA児が自分たちの活動を伝えた後、動画を放映した。教室に戻るとクラスの友達から拍手が起きた。祝福を受けたA児の表情は自信に満ち、満足した様子だった。

資料⑩は単元のまとめの振り返りである。3の3消防団としての活動に対して、「放送に流されたとき上手くいくかなと思ったけど、上手くいってよかった」と綴った。単元の活動前、主体性を感じることができなかったA児が、自ら進んで活動を選択し、3の3消防団としての活動を通して自分に自信をもてた確かな証拠であった。また、振り返りの最後に「ぼくはもともと消防士になりたいと思ってたけど、この活動から、もっとなりたいと思いました」とまとめていた。A児の消防士になりたいという夢。それを振り返りで知ったとき、不思議な感動が体の中を突き抜けた。3の3消防団、この学びは地域の安全を守る働きについて学習しただけでなく、A児の将来にも影響を与えるものになったのかもしれない。A児はよい良い社会の担い手となるだろうという確信を抱きながら、本実践は幕を閉じたのである。



資料⑩：第14時A児のノート



資料⑩：第14時動画撮影の様子

活動して思ったことはさいしょはどうやってやるかを考えてこれで大丈夫かなと思ったけど動画をやってみると意外に上手くいってよかったです。放送に流されたときは上手くいくかなと思ったけど上手くいってよかったです。

三の三消防団を終えて、消火器や消防士さん、消防団の人たちのことを知れてよかったなと思いました。最後は動画で消火器の使い方をみんなに教えて火事が起きても大丈夫かなと思いました。ぼくはもともと消防士になりたいと思ってたけど、この活動から、もっとなりたいと思いました。

資料⑩：第15時A児単元の振り返り

4 考察

児童Aは、本研究を通じて、火事から暮らしを守る仕組みを主体的に探究した上で、問題点を発見し、よりよい学区にしようとして行動するようになった。このようにA児が変容したのは、手立てが有効に作用したからである。以下、手立てについて検証していく。

【手立て①：3の3消防団の結成】(仮説Iとの関連)

P.2資料⑦のように、3の3消防団の法被を作成し、探究活動の際は必ず法被を着用した。3の3消防団として追究活動を行ったことで、A児はP.5資料⑩で「ちょうせんしてみようとおもいます」と、積極的に実践しようという思いをもつことできた。

【手立て②：体験的調査活動】(仮説Iとの関連)

P.2資料⑩の話し合いでは、消防署での聞き取り調査から、消防士の方が準備をする理由を話し合った。その話し合いを受けてP.3資料⑪でA児は「すぐに、いつでも」というキーワードを用いて学習をまとめた。また、P.2資料⑧のような消火器体験を行うことで、P.5資料⑨で消火器の使い方を知らせることについての提案が生まれ、P.6資料⑫のようにA児が実際に活動を行った。子供たちは体験的調査活動を通して、実感を伴った理解をし、自ら新たな追究を生み出していくことができた。

【手立て③：選択型追究】(仮説Iとの関連)

P.3資料⑬の記述のように、一人で学習を進める良さに気付いたA児は、P.3資料⑭のように一人で学習を進めることできた。さらに、第12時では、与えられた40分間を個人追究と協働的な学習に分けて学習を進め、P.5資料⑯では、「さいしょは自分でやった方がいい」と自らの学習形態を決めることができた。一方で、子供の発達段階に応じて、委ねる部分を増やすこともできるだろう。よって手立て③は一定の有効性は感じられたものの、検討の余地があると考えられる。

【手立て④：地域の教材化】(仮説IIとの関連)

P.5資料⑰の活動を考える話し合いでは、子供たちは地域にある消防署や消防施設への見学、消防団出前授業を通して、消火器の使い方や場所に対する認知度の低さや、消防士や消防団の人手不足という問題点に気づき、改善策を練ることができた。子供たちにとって身近な地域を教材化することで、社会の問題点を捉え、活動に生かすことができた。

【手立て⑤：地域の人の活用】(仮説IIとの関連)

P.4の38行目よりA児にとって消防団の団長は通学路に毎朝立っている交通指導員だった。身近な人が地域の安全を守ることに関わっていた経験がP.5資料⑰の「火事が起きていることを知らせる」という発想につながった。しかしこの発想は子供の力では実現しにくいものであった。より子供にとって身近な活動をしていないか、消防団と打ち合わせを綿密に行う必要があった。よって手立て⑤は改善の余地があると考えられる。

【手立て⑥：発信の場の設定】(仮説IIとの関連)

消火器の使い方を広めたいと使い方を説明する動画を作ったA児に対して、P.6の5行目でお昼の放送で全校に動画を流すことを提案した。放送した後のP.6資料⑫の振り返りでは、A児は「上手くいってよかった」「活動から、もっと(消防士)になてみたい」と記述した。発信の場の設定によって、A児の夢を後押しすることができた。

5 おわりに

P.6資料⑫の「消防士になりたい」というA児の記述を読み、学級全体の子供たちの思いが気になったため、「消防士や消防団になろうと思った人」と質問した。すると、A児以外に15人程度の子供たちが手を挙げた。3の3消防団として追究活動を行い、自分たちにできることは何か考えていた活動に価値を感じた瞬間だった。これからも主体的に追究を行い、身近な問題からよりよい社会づくりを考えようとする子供を育てていきたい。